

# 国語科書写と芸術科書道との関連

——書写から書道Ⅰへの系統的展開に関して——

森 哲 之

## はじめに

中学校国語科書写は、新学習指導要領において言語事項に位置づけられ、文字指導の観点から、文字を正しく整えて読みやすく書かせることに留意し、書写の能力を生活に役立てる態度を育成することがねらいとして示されている。また、その後においては高等学校芸術科書道へ繋がる内容を含むことから、その導入としての基礎的役割を担う。毛筆による技法については、書写、書道両者に本質的な違いはなく、書としての根元は同一のものである。一方、書写教育と書道教育という教育の観点からは、国語科と芸術科との立場の違いによって教育上段階的な学習内容が設けられている。そこで、それぞれの目的や内容の違いよりは、むしろその共通的关系性を探ることにより、書写において本来的になされるべき学習の意義が浮き彫りにできるので

はないかと考える。それらを広義に書教育として捉えれば、書写指導については、後に続く書道の学習への関係に密接な繋がりが求められるのではなからうか。

本稿では、新学習指導要領に基づき、中学校国語科書写の指導において、高等学校芸術科書道Ⅰへの発展がどのように意図されるべきか、また、書道Ⅰの観点からは、書写の基礎、基本とされる内容についてどのようなことが求められるかを考察し、特に毛筆使用に関わる学習を中心に述べる。また、中学校国語科書写に関する事項を、高等学校芸術科書道Ⅰの性格、目標、内容と比較し、実際の指導における系統的性質を見いだしたい。

## 一 書写に関する事項と書道との関連

書写と書道との相互の関連について、『中学校学習指導要領解説国語編』(平成一一)<sup>1)</sup>の書写に関する事項では、

「高等学校との関連については、小学校及び中学校国語科書写は高等学校芸術科書道の基礎でもあるということから、書写の学習指導のねらいや第2学年及び第3学年の内容において関連を図ることができるよう配慮してある。」としている。このことについては、高等学校芸術科書道の授業における導入の視座から、中学校国語科書写の授業との連携をスムーズに移行するための関わりを導き出す必要がある。そのために教育としての書写、書道の一貫性が求められよう。書写の学習内容から段階的に発展させる書道において、関係性をどのようにすべきかには、書道の立場から思考する書写、または書写の立場から思考する書道に相關関係が考えられる。

さて現在、書道教育の範疇に書写の内容は含まれ、書写は書道の基礎と位置づけられている。学習指導上、その方向性は一致するはずであり、書写教育と書道教育とは相違するという見方がややもすれば、書写は書道とは相違するというように安易に置き換えられてはならない。書写の指導において、書道の教育的内容が反映されるよう、実際の指導方法を見いだしていくところにその位置づけの意義合いがある。

さらに、「文字感覚の育成」についても触れられているが、文字感覚を養わせるためには、基本とされる書に数多く触れさせることが効果的であろう。文字、あるいは書を

見て憧れを持たせる動機付けは、創造活動における原点でもあり、書道Ⅰへの関連として結びつく。書写教育では、独自性や創造性が求められるものではないが、学習者に身に付けさせるべき日常に活用できる基礎としての書写能力の育成に繋がる見方でもある。そのためにも文字感覚の一つの考え方として、書は活字では味わうことのできにくい肉筆書写であることを意識させ、「生きた文字」という認識を持たせるところに書のよさを見いださせる方法が考えられる。

## 二 書道Ⅰの性格、目標と書写との関連

『高等学校学習指導要領解説芸術編』(平成一一)<sup>(2)</sup>の書道Ⅰの性格の中に、「小・中学校における書写の学習を基礎として、書道の幅広い活動を展開して、生徒が個性や能力を生かし」とある。また、「小・中学校との接続を図り、書写能力を高めながら」と、漢字仮名交じりの書を生活に生かすという観点からも、「中学校国語科書写と高等学校芸術科書道との系統性を踏まえる」ことが挙げられている。書写と書道との接続や系統性において、書道の基礎となるための書写の学習であることがここでも示されている。

次に、書道Ⅰの目標には、「書写能力を高め」とあり、

解説では「小・中学校で身に付けた書写力を基礎としながら、段階的に文字を素材とする自己表現への展開を図ることが大切であり、そのことが書写力を発展させる」とされ、書写力の書道との関連について触れられている。このように、書道Ⅰには書写との関連が様々に取り上げられ、書写においては、書道Ⅰを踏まえた内容としての基礎たる視点を盛り込み、書写の指導者が、書道Ⅰの目標を積極的に考慮する必要があると考えられる。

### 三 書道Ⅰの指導内容から書写指導への観点

#### (1) 漢字仮名交じりの書の表現に関して

書道Ⅰにおける性格は、小・中学校との接続を図り、書写能力を高めながら書道の学習ができるよう、「表現」の構成順序が入れ替えられ、漢字仮名交じりの書を重視している。書道Ⅰの漢字仮名交じりの書の表現に関して、解説には、「中学校国語科書写と高等学校芸術科書道との関連性を踏まえ、また、書を生活に生かす態度の育成を図るための基本的な分野であること等を重視して」とある。また、漢字仮名交じりの書の項目について、書写の内容と照らし合わせた場合に、「表現と用具・用材との基本的な関係」「漢字と仮名の調和した線質の表し方」「字形、文字の大きさ」と全体の構成「目的や用途に即した形式と表し方」

「意図に基づく表現の構想と工夫」が挙げられ、内容の差はあるが相関関係を持つ。

芸術としての書道へ繋がる書写の特性に目を向けると、毛筆、硬筆に関わらず漢字仮名交じりの書を書くという行為自体に大きな意味がある。書写においては、漢字に合わせた仮名を考えることになっており、その漢字の楷書については、楷書の基本点画や結体の構造等を勘案し、それに合わせた運筆をもって仮名を工夫することになる。

その一方、漢字の書や仮名の書においては古典、古筆があり、その学書方法には、臨書から創作への展開がある。創作においては、古典を始め近世から近現代の書作品を鑑賞させることにより、その書法を捉えることができる。漢字仮名交じりの書<sup>③</sup>についても、その資料の紹介とともに成立について目を向けさせることは有益であり、その中で書写においても読みやすいという観点から、より効果的な提示資料に関わりを持たせることが考えられる。

#### (2) 漢字と仮名の調和に関して

「調和」については、中学校の書写と高等学校の書道で取り上げられる観点であり、中学校書写第1学年の指導事項イ、第2学年及び3学年の指導事項ア、イに見られる。

まず、第1学年の指導事項では「漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き」とある。また、第2学年及び第3学年の「ア 字形、文字の大きさ、配列・配置などに

配慮し、目的や目標に応じて調和よく書くこと。」「イ 漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名の書き方を理解して書くとともに、読みやすく速く書くこと。」に「調和」が見られる。

アについては、形式が関わり、広義には書式<sup>(4)</sup>と関わりの深いものと考えられる。配列についての字間、行間の取り方は、その目的に応じて書式が異なる。配置について解説では、「漢字と仮名のつり合いや紙面の上下・左右の余白の取り方及び全体のつり合い」を判断させることになっているが、これについても書式における関連からつり合いを考えることができる。

漢字と仮名の調和として、代表的古典を基とすることは、漢字と仮名との調和における基準を示すことに繋がる。また、毛筆を使用する際の運筆においては、律動の調和が重要であると考えられる。

### (3) 書を生活に生かす態度の育成に関して

書道Ⅰにおける漢字仮名交じりの書に関する指導事項について解説では、「書を生活の中に生かす態度の育成を図るための基本的な分野である」こと等が重視され、中学校書写との関連に符合する。そこで、中学校書写のどのような内容が实际的に関連付けられるであろうか。

書を生活の中に生かす態度の育成については、中学校国語科の内容の取扱いにおける「書写の能力を生活に役立て

る態度を育てる」という観点に該当する。具体的な指導事項について解説には、学習ノートの記録、掲示文、家庭における手紙などの通信文等が例として挙げられ、その基準となる、もしくは参考となる資料の提示が指導上重要であろう。指導者独自の生の資料も考えられるが、広く客観性のある資料が相応しい。書道Ⅰ、Ⅱでは、「内容の取扱い」における表現と鑑賞の指導の相互関連が見受けられる。

また、「漢字仮名交じりの書」における表現と鑑賞との相互関連は、書写における指導内容を書道と照らし合わせた場合、一致するところがある。解説には「書写された文字についての理解を深めるためには、書かれた文字を見ることの体験を多くすることにより、文字に対する感覚を豊かにすることも大切となる」とあるが、生徒の生活環境では見ることの体験には限りがあり、教師が提示する資料が重要となる。また、多種多様な考え方の現代の書<sup>(5)</sup>の中で、書写のあり方がどのような立場にあるのかを具現化する視点も欠かせない。

日常生活において、文字を丁寧にかくことが目標とされていることに関しては、古典の性格においても、それらが多くがそもそも記録や書簡として書かれたものであるという点からも本来的に日常に生かされるべき書の内容といえる。

#### 四 書写に関する事項における指導観

中学校国語科における書写は言語事項であり、国語科各領域の学習に役立てるための基礎的な事項として位置付けられている。書道Ⅰでは必ず扱うこととされる「漢字仮名交じりの書」については、芸術的な表現とともに実用的な表現も含まれている。

##### (1) 字形の考え方、捉え方

書写第1学年における指導事項では、「字形を整え」て書くことが挙げられるが、標準とする字体は小学校学習指導要領の「学年別漢字配当表」に示されている活字とされる。手書きによる書とは隔たりがあるが、書写教育における標準として示されている。

書写は文字指導の観点が重視されるものであり、その対象に正確な字形の取り方が重要である。書道では線質の変化、書写では線質の安定感が求められる。書写から書道への導入時に大きな隔たりが生ずるのは、書写の性質を考えたときに、感動を抑えた技術的な正確な形似をさせる傾向にあるからであろう。書き写す能力とともに、目的にに応じて活用する能力の育成が図られながら、正しく整えて読みやすくという観点だけではなく、何が良いかを判断させる観点が必要であり、学習者へ苦手意識を持たせない取り

組みが魅力ある書写学習の工夫へと繋がる。また、書道の取り組みにおける実践研究<sup>6)</sup>では、「遊び」の観点を取り入れた試論なども見られる。さらに様々な毛筆を使用した弾力的な書教育の試みが求められよう。この点からも、書道の観点を書写に取り入れられる工夫が考えられる。

##### (2) 漢字の行書及び楷書と仮名の関連

行書については、その基準となるべき視点が具体的には明示されていないが、書道Ⅰにおける漢字の書で取り扱われる行書古典に準ずるところとなろう。中でも比較的読みやすいもの、つまり、書写の方向性として、参考古典等を紹介する意味がここにある。読みやすい古典として、王羲之の行書などが挙げられよう。これに限らず従前の書写の教科書や書写指導の資料においては様々な参考古典が取り扱われている。その運筆における律動に合わせた仮名の工夫が必要となる。書写における行書は、運筆の速度として速く書くことを目的とし、書道では、気脈の貫通や豊かな表現性が問われる。

##### (3) 読みやすく速く書くことについて

解説には「行書を使って読みやすく速く書くことができようにする」とあるが、この観点でいう行書の要素は、気脈や運筆における連続性、流動性、律動、点画における省略等を上げることができる。読みやすく速く書くことについて、読みやすい文字は、文字の点画の組み立てに当た

り、線については、送筆における安定感の持続が重要となる。はね、払い等における筆圧の変化、強弱についても安定したものが求められる。

書写における字間や行間の配置、布置、構成についても、整然と並ぶ統一感、整齊な書美が上げられよう。

## 五 書写に関する事項の取り扱いと書道Ⅰへの展開

### (1) 文字を正しく整えて速く書くことに関して

中学校学習指導要領国語の言語事項の取扱いとして、書写に関する事項についての指導は、「ア 文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。」等と示されている。一方、書道Ⅰの内容の取扱いについて解説では、「漢字仮名交じりの書は、中学校までの国語科書写との円滑な接続を図り、書写能力を高める必要から基本学習として必ず扱うものとして位置づけている。」とある。また、取り扱う書体等についても、「中学校国語科書写を受けて」とあり、書写との接続を考慮している。このことは、中学校の書写がねらいとしている能力について示されたものと合致するものである。

文字を正確に読みやすく書くことのできる能力の育成に

については、技法とともに、先述した書式がより一層関わってくる。一文字における点画の長短や角度、結体のバランスや構築性、字間、行間における構成と統一性、線の安定性等が関わり合う。また、漢字の行書、楷書及びそれに調和した仮名を書くことのねらいとされている速度については、運筆における律動に重要な意味がある。

### (2) 書写の能力を生活に役立てる態度の育成

ここでも、書道と照らし合わせてみると、学習指導要領書道Ⅰの内容の取扱いについて「日常生活における目的や用途に応じて硬筆も取り上げるものとし」とある。書写から書道への系統では、日常生活に生かされる書の観点が挙げられている。用筆や運筆における確かな技法や対象そのままを正確に書き写すことのできる力を付けさせるとともに、字体、点画、筆順等に留意し、正しく整った文字を書かせるようにすることなどに努めさせることが必要とされる。その基本能力の上に、生活のあらゆる面で書写が生かされていくことに繋がる。

### (3) 毛筆による書写の学習の効果

書道Ⅰの学習における基礎としての書写とは、毛筆を使用する場合、筆法に関わりが深い。書写教育では、筆使い、筆運びとして示されているが、書道教育においては用筆、運筆に相当する。毛筆の弾力を生かす方法について、線の太細の変化、文字としての骨法などを捉えるところに、高

等学校芸術科書道の基礎を担うところがある。そのような考えの上に、起筆、送筆、収筆の捉え方等技法の向上が図られる。

書写がねらいとしている態度については、「イ 毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、硬筆による書写の能力の基礎を養うようにすること。」とある。

ここで、毛筆を使用する書写の学習によって、硬筆による書写の能力の基礎を養うということは、実際的には、用筆、運筆における筆圧の変化や遅速緩急の変化等を捉えることが考えられる。例えば、払いにおける毛筆での動きが、硬筆では太細の変化は付けられないが、その律動を体感するところに大きな意味があると考えられる。

毛筆の特性として、運筆における筆圧の変化が挙げられる。このことは、抑えるばかりではなく、引き上げる作用が生じてくる。硬筆においても、引き上げる運筆の作用が掘めるならば、特に行書における運筆の容易性に繋がり、速く書くための技法として有効である。筆画を書写するに際して、次の点画へ自然に移り変わることでできる方法であり、硬筆のための毛筆の役割が生かされることにもなる。

## おわりに

書写、書道教育に共通する観点としては、書の良さを捉

えるところにあり、取り扱う書の資料の範囲や内容においては違いがある。そして、書写の学習が、書道の学習にとって基礎と位置づけられることの意義には、筆法の関わりが考えられる。また、書道の学習における漢字仮名交じりの書に繋がる内容が書写から直接的に結びつくところであり、特に、書写で取り扱われる内容において、漢字と仮名との調和を捉えるところに書道との関連が見いだせる。つまり、運筆における筆圧の変化や律動、呼吸等が書写においても意識されるべき観点であり、そのため、提示資料に重要な意味があろう。

また、書道Ⅰにおける漢字仮名交じりの書の学習を想定し、書写での漢字と仮名との調和を運筆上、より自然な方向へ導かなければならない。漢字の楷書、行書の運筆を基とした解釈とともに、仮名の運筆に適した方法を見いだすところに、書としての関係性がある。そして、書写の指導において、書道の指導内容の認識を加えた観点到効果的な方法を考えていく必要があるのではなからうか。

注(1) 文部省『中学校学習指導要領(平成一〇年一二月)解説―国語編―』、東京書籍、一九九九年。

(2) 文部省『高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』、教育芸術社、

一九九九年。

(3) 古谷稔編著『漢字かな交じりの書』(雄山閣書道講座 一一)、雄山閣、一九九八年。漢字かな交じりの書を歴史的観点から捉え、各時代の広範な作例が編まれ、漢字仮名交じりの書の学習に配慮される。

(4) 野中吟雪編「書式」(書学体系・研究篇一四「書式と表装」、同朋社、一九八六年。書式の種類が網羅され、書や書式について先人による多くの名品に接する大切さをいう。

(5) 野中浩俊『現代の書道(日本)』(書の基本資料⑤)、中教出版、一九九二年。

(6) 豊口和士「国語科書写から芸術科書道への展開に関する実践研究」『書写書道教育研究』第一四号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇一年。

(7) 全国大学書写書道教育学会編『書写指導(中学校編)』、萱原書房、一九九四年。

(本学講師)